

第2回（1980年） 東方学術賞授賞理由

主にインド思想・文化およびアジアにおけるその発展段階を研究している学者、研究者を顕彰することを目的として、東方研究会では前年度から〈東方学術賞〉を設けることにし、インド大使館と共同主催することになりました。

よって選考委員（石田瑞麿、勝又俊教、玉城康四郎、土井久弥、中村元、水野弘元、山口恵照の七氏）のあいだで慎重に討議されました結果、今年度（第二回）の東方学術賞として、奥田慈應、奈良康明、川崎信定、故静谷正雄の四氏の業績を顕彰することに決定しました。次のような挨拶状を発送しました。

拝啓 中秋の候 貴台におかれましては御清祥のことと御慶び申し上げます
さて 財団法人東方研究会におきましては 斯学の発展を計るために真に学問的意義あり 世の人々を益する恒久的な事業を遂行したいと兼々念願しておりますが
本年度もインド大使館と共同主催にて 学者の秀れた業績を世に広く顕彰することに致しました

先般来 選考委員会において慎重審議の結果

特別顕彰として	奥田慈應殿（四天王寺勸学長）
学術賞として	奈良康明殿（駒沢大学教授）
学術奨励賞として	川崎信定殿（筑波大学助教授）

なお本年度は特別に追悼学術顕彰として 故静谷正雄殿（龍谷大学教授）の学績を讃えることに決定しましたので 左記の如く 顕彰式を行ないます

一、場 所 インド大使館

東京都千代田区南九段二丁目二ノ十一（千鳥ヶ淵）

一、日 時 昭和五十五年十一月二十一日（金曜日）午後三時

つきましては 御多用中恐縮ながら御来駕の榮にあずかりたくここに
御案内申し上げます 敬 具

昭和五十五年十月吉辰

財団法人 東方研究会

理事長 中 村 元

各 位

右の案内状のごとく、昭和五十五年十一月二十一日午後三時から東京・九段にあるインド大使館で顕彰式が行われ、駐日インド大使臨席のもとにはじまりました。

中村理事長は、インド大使の祝辞のあとで、これらの方々の功績をたたえて次の演説を行いました。

「これより受賞者のお一人お一人の功績の顕彰に移ります。

奥田慈應師は、大阪の人々が精神的なよりどころと仰ぐ和宗、総本山四天王寺の勸学院長として、多年にわたり、学問的な指導に当って来られました。四天王寺は聖徳太子の創立された日本最初の寺院であります。奥田師は聖徳太子の著書と伝えられる勝鬘經義疏、維摩經義疏の厳密な校定本を作成されました。

さらに進んで、その国訳を試みたのみならず、現代語訳までも刊行されました。さらに聖徳太子の思想の意義を解明するために、多数の著書論文を著されたのみならず、八十二才の高齢にもかかわらず、一般大衆のために、殆んど毎週講義講演を行なっておられます。お見受けしたところ、まことに若いのでありますが、恐らく仏教の教えを説くばかりでなく、身を以て実践しておられるところに起因するのであろうと、ひそかに敬慕いたしております。半世紀以上にわたる学問的また教化上の御活動に深く敬意を表し、ここに貴台の御功績に対し、失礼ではありますが、「東方学術特別顕彰」をもっておむくい致したいと存じます。

奈良康明博士は、駒沢大学教授であります。カルカッタ大学の特別の奨学資金を受けられ、三年間同大学に留学し、仏教サンスクリットの権威セーン博士の指導を受け、仏教サンスクリットで書かれた古典に関する著書論文がいろいろあります。またインドへしばしば旅行され、インド人の生活体験や思想をつぶさに知悉し、どこまでも自分で確かめられながらインド仏教史を研究して来られました。従来、日本ならびに欧米におけるインド仏教の研究がややもすれば、古典の内容紹介に終始する傾きがあったのに対し、奈良博士は、宗教の社会的基盤に注意し、民衆の生活を見つめながら研究を進めて来られました。その成果は、現在印刷中の学位論文の中にまとめられていますが、その要点は昨年刊行されました『仏教史Ⅰ』の中に要約されています。

博士は多年インドに留学されたため、ヒンディー語、ベンガーリー語にも精通しておられますが、ヒンディー語、ベンガーリー語が話せて、その知識や体験を生かしながら古代文化を研究し得る学者は、日本でも西洋でも極めて稀でありましょう。奈良博士の諸研究が、従来の諸学者の研究成果から一歩出て、生き生きとした感じを与えるのは、そのためでありましょう。

新しい視点からの研究を開かれたその意義を高く評価し、財団法人東方研究会は『東方学術賞』をお贈りしたいと存じます。

川崎信定教授は、篤学の士であります。幾多の注目すべき特徴を具えておられます。まず第一に推称すべきことは、同教授のサンスクリット読解力が極めて正確であるということであり。わたくしは先年東京大学在職中に演習で同氏とともに、インド哲学の古典を読みましたが、同氏の訳は正確であり、わが国の著名な学者の邦訳よりもすぐれているということに打たれました。川崎教授は、インドの諸哲学体系のうちでも、特にミーマーンサー学派の哲学と取り込んでおられます。

第二に、同氏は、インド哲学を専攻するに至る以前に、東京大学のアメリカ研究科に在籍、修了したことがあり、英語に極めて堪能であり、英文による論文が多いのもそのためであり。東京大学印度哲学研究室の助手であったときに、たまたまニューヨーク州立大学の Riepe 教授の認めるところとなり、ニューヨーク州立大学の講師に就任して渡航し

ました。日本の大学の助手が、いきなり外国の一流大学の講師に抜擢された例は、小生はほかに存じません。しかし好学心の盛んな川崎氏は、さらにそののちアメリカおよびインドの大学で専門の大家に就学して、研究を進めました。

第三に、川崎教授はチベット語が読めるのみならず、チベット語で会話ができるという稀な学者であります。文献を読んで暗中模索するのとは異なって、チベット人から生きた伝承をじかに受け取ることができるという点は学者としては圧倒的に有利な点であります。

川崎教授はこのように稀な天稟資質をそなへた学者であり、春秋に富み、これからの人でありますので、ここに財団法人東方研究会は『東方学術奨励賞』をお贈りしたいと存じます。

故、静谷正雄教授は、京都の龍谷大学の教授であられましたが、惜しいことに、本年春に急逝されました。

静谷教授の学問上の大きな功績は、インドの碑銘を研究され、わが国ではその方面の第一人者であられたということでもあります。

インド古典は、膨大なものが残されていますが、詩的空想的叙述が多く、どこまでが事実で、どこからが、想像によるものか、はっきり区別が付きません。これに対して歴史的現実を確かに知らせてくれるものは、現在多数残存している古碑銘であります。静谷教授は、仏教がインドに存続していた時代のあらゆる古碑銘を千数百年にわたって検討されました。そうしてそれを手がかりにして、小乗仏教史と大乘仏教史を組み立てられました。インド仏教史というものが、単なる空想にもとづくものではなくて、確実な基礎を得たのであります。

さらに同教授は、多年平安高等学校の教諭を勤めておられましたが、その余暇を利用してこのような偉大な研究を完成されたということは驚ろくべきことであります。地位や設備とはかかわりなく、もしも学者が真に好学の精神に燃えているならば、立派な仕事を完成し得る、という範を示されたものでありましょう。

御本人がすでに世を去られたことは、痛惜の至りではありますが、学人の本領は研究成果にあり、それは不滅のものであります。財団法人東方研究会はここに故・静谷正雄教授のために『追悼学術顕彰』を行なうことに致しました。幸いに本日は奥様の静谷住子夫人が御出席下さっております。諸方面の御賛同をお願い申し上げます。

最後にインド大使から東方研究会に二十四冊の書が寄贈されました。

この顕彰式には朝野の学問、宗教、外交、教育の関係者の方々が参列し、講堂に満ちあふれ、式後に別室でパーティが行われました。